

第二十九回「全日本中学生水の作文コンクール」入賞作文集

# 水について考える

主催 国土交通省・都道府県

後援 文部科学省・全日本中学校長会

水の週間実行委員会

独立行政法人 水資源機構



## 「あいさつ」

国土交通大臣 冬 柴 鐵 三

地球上のすべての生命体は、水によって育まれてきました。水は人間や動植物が生きていく上で、欠かすことのできない貴重な資源です。しかし、私たちが利用することのできる水は、地球の表面を覆っている水のほんのわずかな部分に過ぎません。この貴重な水は、太陽エネルギーにより蒸発し、雲に姿を変えた後、雨や雪となって地上に降り注ぎます。そして、地表に降った雨や雪は、地中へ浸透し地下水となったり、あるいは河川の流れとなって、上流から海へと至る循環を繰り返しています。私たちは、循環の過程の中において様々な形で水を利用し、使った水を再び循環系に戻しています。この水の循環を健全な状態に保つことが、今日の私たちにとって極めて重要な課題となっています。

国土交通省は、水の重要性に対する国民の関心が高まり、理解が深まるきっかけとなるよう、昭和五十二年から「水の日」と「水の週間」を定め、様々な行事を行っており、この「全日本中学生水の作文コンクール」は、昭和五十四年からこの行事の一環として、次代を担う中学生の皆さんに、日常生活での体験あるいは両親や先生から学び聞いた話などをもとに、「水について考える」というテーマで実施しているものです。

今年、第二十九回を迎え、全国（海外を含む）の中学生から一六、一七三編（学校数三八五校）もの応募がありました。応募された作文は、日常生活における水の貴重さや大切さを表現したもの、身近な体験から美しく豊かな水を未来に伝えていくために私たちがなすべきことを表現したものなど、水を大切にしていこうとする中学生の皆さんの気持ちがよく表現されており、深い感動を覚えました。このたび、入賞作品三十一編を作文集にまとめましたので、多くの方にお読みいただき、学校や家庭において「水」について考えるきっかけになるよう願っています。

最後に、作文コンクールの実施にあたり、応募された中学生の皆さんや担当の諸先生方、また御多忙のところ審査をいただきました審査委員の先生方に厚く御礼申し上げますとともに、御協力をいただきました都道府県、全日本中学校長会、水の週間実行委員会及び独立行政法人水資源機構等関係の方々に深く感謝を申し上げます。あいさつといたします。

平成十九年十月

## 「水の日」及び「水の週間」について

昭和52年5月31日

閣 議 了 解

水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性について国民の関心を高め、理解を深めるため、「水の日」を設ける。

「水の日」は毎年8月1日とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、ポスターの掲示、講演会の開催等の行事を全国的に実施するものとする。

上記の行事は、地方公共団体その他関係団体の緊密な協力を得て行うものとする。

## 「水の日」及び「水の週間」制定の理由

わが国の水の需要は、生活水準の向上、経済の進展等に伴って近年著しく増大してきたが、一方水資源の開発は次第に困難になっており、渇水時には水不足が生ずることが予想される状況となっている。

このような状況にかんがみ、毎年8月1日を「水の日」とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性に対する関心を高め、理解を深めるため諸行事を行うことによってわが国の水問題の解決をはかり、もって国民経済の成長と国民生活の向上に寄与することとしたい。

なお、諸行事を行うためには、年間を通じて水の使用量が多く、水について関心が高まっている8月の上旬が適当であるので、その初日である8月1日を「水の日」とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」とするものである。

最優秀賞(一編)	青森県 弘前市立第三中学校二年	小山内 香純	2
(国) 土 交 通 大 臣 賞	移転した人たちに感謝して		
優秀賞(五編)	福島県 須賀川市立第二中学校一年	永山 貴啓	4
(全日本中学校長会会長賞)	一杯の水		
(水の週間実行委員会会長賞)	命を育む水		
(独立行政法人水資源機構理事賞)	「水の星」地球		
(国土交通省水資源部長賞)	水について考える		
(全日本中学生水の作文コンクール中央審査会特別賞)	水の「ありがとう」味		
入選(二十五編)	愛知県 愛知教育大学附属名古屋中学校三年	荒木 健吾	12
青森県 八戸市立明治中学校三年	熊野 翔一	14	
岩手県 軽米町立小軽米中学校一年	梅木 大幹	15	
福島県 須賀川市立西袋中学校二年	鈴木 宗一郎	16	
群馬県 群馬大学教育学部附属中学校三年	宇津木 尚子	17	
埼玉県 鶴ヶ島市立鶴ヶ島中学校二年	山田 祐梨子	18	
神奈川県 葉山町立葉山中学校三年	森川 愛美	19	
富山県 氷見市立南部中学校二年	水上 瑛麻	20	
山梨県 駿台甲府中学校二年	副島 七海	21	
静岡県 興誠中学校二年	小林 太士	22	
静岡県 浜松市立入野中学校三年	太田 ひより	23	
三重県 皇學館中学校三年	奥田 千穂	24	
京都府 立命館宇治中学校二年	木村 匡一	25	
大阪府 堺市立三原台中学校二年	佐藤 優衣	26	
第二十九回 「全日本中学生水の作文コンクール」	ポスター		
第二十九回 「全日本中学生水の作文コンクール」	概要		
第二十九回 「全日本中学生水の作文コンクール」	地方審査優秀者名簿		
第二十九回 「全日本中学生水の作文コンクール」	応募状況		
第二十九回 「全日本中学生水の作文コンクール」	応募状況の推移		
第二十九回 「全日本中学生水の作文コンクール」	表彰式		

最優秀賞（国土交通大臣賞）

移転した人たちに感謝して



青森県 弘前市立第三中学校

二年 小山内 香純

「水とば無駄使いすればだめだ。大切にしないさい。」私は祖父母の家に行ったとき、水の無駄な使い方について注意されたことがあります。祖母は水についてとても厳しく、そして誰よりも水を大切にしています。しかし私は、こんなに水があるんだから少しくらい無駄に使っても大丈夫なんじゃないかと思っていて、なぜ祖母がそこまで水を大切にするのかわかりませんでした。

ある時、同窓会から帰ってきた祖母が教えてくれました。「私は昔、砂子瀬というところに住んでいたんだよ。」私の母が生まれる少し前、祖母は砂子瀬という、西目屋村の集落に住んでいたのだそうです。そしてその砂子瀬と川原平は、ダムの下に水没してしまった集落なのです。

昭和三十五年、目屋ダムが建設されました。目的は、治水・利水・発電です。そのダムを建設しなければ、水不足や洪水で困る人がたく

さん出てしまいます。しかし、それらのことで困るのは下流の人であり、砂子瀬の人たちはダムが造られても関係ありませんでした。

そんなダムのために、住みなれた家や土地、砂子瀬の文化や歴史など、今まで大切にしてきたものをすべて失わなければいけないのです。皆移転に反対しました。祖母も、祖母の家族や親戚の人たちも、猛反対しました。しかし下流の人たちは、何としても水不足や洪水による被害をなくしたかったのです。

そこで起こったのが「米一握り運動」でした。砂子瀬の人は我々のために移らなければならぬ。だからみんなで一握りの米を、砂子瀬の人に気持ちとして出そう。そう思った下流の人たちは、自分たちの食料も水不足の影響で少ないなか、米を一握り持ち、砂子瀬の人に差し出したのです。津軽平野に住む全住民を対象にした運動でした。

その気持が砂子瀬の人に伝わり、皆移転を承知しました。目屋ダム

は、そんなたくさんの人のいろいろな思いがつまり建設されたのだそうです。

私はそんなことも知らずに、水の無駄使いをしていたことがとても恥ずかしくなりました。そして祖母が水を大切にしている理由もこのようなことがあったからだったのです。

しかしそんな目屋ダムも、今じゃ公然と容量不足が指摘されているのです。そして新しく、津軽ダムが建設されることになったのだと教えてくれました。祖母は一度の移転ですみましたが、祖母の親戚の人たちは、移転した田代地区からもまた移転しなければいけなかったのです。

しかも今度の移転によって、今までの、山に日々接し自然に囲まれてきた生活は困難になり、生活スタイルは変わってしまうのです。それなのに、この津軽ダムは、津軽地方の安全で豊かな暮らしを実現するための、大きな役割が期待されているのです。

二度も大切にしてきたものを失わなければならなくなった田代地区の人の気持ちを考えると、決して水を無駄にしてはいけないのだと反省しました。祖母の親戚の人たちも、移転はしたくなかった、ずっとあそこにいたかったと言っています。「水を無駄使いすればだめだ。

大切にしないさい。」祖母のこの言葉が、たくさんの人に届いてくれたらいいな、そう思いました。

ダムのおかげで、私たちは水に困ることがありません。しかし、そんなダムを建設するために、たくさんのものを失って移転した人たちがいるのです。洪水を防ぎ、水を使う私たちのために、移転せざるをえなかった人たちがいることを忘れてはならないと思います。

水を大切にしよう。そんな心で、水を支えてくれた人たちに感謝して、これからも水を大切にしていきたいです。

優秀賞（全日本中学校長会会長賞）

一杯の水

「歯みがきはコップ一杯の水でしなさいね。」と母の声。分かっている。ぼくは多分だれよりもコップ一杯の水の大事さが分かっている。

その日は、朝から蒸し暑い日だった。夏休みだったぼくは、プールへ行こうと家を出た。その時、三人のおばあちゃんたちから呼び止められた。はすむかいの家で草むしりの仕事に来ていたシルバー人材のおばあちゃんたちだった。

「お兄ちゃん、近くに自動販売機は無いかい。」  
と聞かれた。ぼくは、

「この坂を下って五分位の所です。」  
と答えた。その日は午前中の仕事だったので飲み水の用意をしてくなかつたそうだ。家の周りの仕事だから庭の水道も使えないそうだ。

「この坂を上り下りするのは大変だから、お昼までがまんしようか。」  
と三人で話している。ぼくはプールへ向かおうとした。その時ぼく



福島県 須賀川市立第二中学校

一年 永山 貴啓

は、顔から汗を出しながら畑仕事をしている祖母の姿を思い出した。ちょうど祖母と同じ位の年でおばあちゃんたちの顔と重なったのだ。

（ぼくのおばあちゃんだったらどうしよう。）とぼくは思った。暑さで顔を赤くして汗だくのおばあちゃんを何とかしてあげたかった。

ぼくは家へ戻った。冷蔵庫を開けたが、麦茶はほとんど残っていない。その日は朝から母が出かけていて家にはいなかった。ぼくは、コップを三つ出して、氷をいっぱい入れた。そして、水道水を入れ、お盆に乗せ、おばあちゃんたちへ持っていった。ぼくは、

「水しかないけど飲んでください。」  
と言った。おばあちゃんたちは一気に水を飲んだ。そして、  
「あー、うまい。本当にありがとう。助かったよ。」

コップの水を飲みほすと、おばあちゃんたちの赤い顔は、普通の顔の色に戻っていった。ぼくは、とてもうれしい気持ちになった。ぼく

は、コップを片付けてプールへ向かった。

そんな事があつた事を忘れかけていた秋の終わり頃、ぼくが学校から帰ると、母はうれしそうに、

「今日、貴啓が水をあげたおばあちゃんたちが家に来たよ。そして、野菜と新米を持ってきてくれたよ。」

と言った。台所をみると山のようになっている野菜とお米。おばあちゃんたちはすぐにお礼にきたかつたらしいが、なかなか近くに来る機会がなかつたとのこと。ぼくはお礼をもらうために水をあげたわけではなかつたが、一杯の水でそんなに喜んでくれた事が驚きだった。その晩の御飯の野菜と新米は、おばあちゃんたちのようにあつたかい味がした。

それから、夏の草むしりには野菜、秋の落ち葉片付けには新米を持ってきてくれる。おばあちゃんたちは来るたびに、

「あの時の水の味は忘れられない。本当においしかった。」と毎回同じ事を言うそう。おばあちゃんたちは暑い夏の日がくるとぼくのことを思い出してくれるそう。家族でない人がぼくのことを思い出してくれるなんて、なんて幸せなことなのだろうか。たった一杯の水からぼくは、人とのつながりを知ることができた。そして、おばあちゃんたちから幸せな気持をもらった。

コップ一杯の水から生まれた人とのつながり、そして、うれしさと

優しい気持ち。ぼくが今までむだ使っていた水は、コップ何杯になるのだろうか。そして、その水がどんなに有効に使えたのだろうか。ぼくは、歯みがきコップの水をみながらそんな事を思い、もっと大事に水を使わなくてはいけないと思った。

優秀賞（水の週間実行委員会会長賞）

命を育む水

今から二年前の梅雨、その事件は起きた。我が家の裏には溜め池がある。その年は空梅雨で、まったくといっていいほど雨が降らなかった。近所の田んぼには水が必要であるから、そこから水は引かれる。補充はない。必然的に、池は徐々に水位を下げ始めた。池が危機に陥ったのだ。

棲んでいる昆虫や魚類、ザリガニなどの甲殻類も酸欠で水面へと上がってきた。とうとう池の水位も一〇分の一程度となり、少なくなつた水面に、その亡骸をさらすものも現れだした。

見かねた私たち家族は、夕方になるとバケツに水をくみ池に運んだ。「焼け石に水」、このぐらいではどうにもならないことはわかっていた。だがじつとしてはいられなかったのだ。幼いころから見てきた池。そこに棲むザリガニなどに夢中になり、時間を過ごした場所。今ではあまり見かけることができなくなったトンボたち（コシアキトン



熊本県 熊本市立三和中学校

二年 北口 明奈

ボ、オニヤンマなど）を、どうしても守りたいと思った。

母は市役所や博物館、いろんなところにどうにかならないかと電話をかけた。だが、私たちの望む答えはなかなか返ってこなかった。「自然のことですからねえ……」と。

私たちは、何かできないかと思い、家にある大きな水そうやバケツなどあらゆる入れ物に、魚やザリガニをいったん避難させることにした。悪臭はしたが、必死に虫とり網などを使って救助した。恵みの雨が降るまでと思い……。だが、すぐには降らなかった。

見かねた父が、職場から週末限定で長いホースを借りてきてくれた。一晩中水道から水を引いた。その甲斐あって、わずかだが水位が上昇した。水溜りに近い池だが、ほんの少し希望が出てきたように感じた。

次の日、だいぶ悪臭を放っていた魚たちの死骸の除去に市役所の職

員が訪れた。また、近所の人づてで話を聞きつけた、市議会議員さんも訪ねてくれた。善意の輪が広がるのはこのようなことなのだと思った。悪臭のひどい中、胸までつかって魚の死骸を除去して下さった市職員の方には、本当に感謝している。

あとは雨待ちだった。幸いなことにその後二日間、まとまった雨となった。まさに恵みの雨だった。雨が降ってこんなにうれしかったことはなかった。この雨のおかげで、池の水位はほぼ戻った。これにも驚いた。私たちが何日もかかってやったこと、その数倍いや数十倍のことができてしまうのだから。

テレビなどでよく「大自然の驚異」などという。今までは特に気にもかけていなかった。自然の力をすごい、すばらしいと感じることができた。

あれから二年が経つ。あの時池に水を引いたことは、本当に正しかったのだろうか、正直思うことがあった。しかし、今も変わらず、前と同じようにトンボが飛び交い、魚が泳ぎ、カエルの鳴き声が響いているこの池の様子を見ると、よかったのだろうかと思う。

この出来事を通して私を感じたこと。それは、水というのは生命の源だということ。普段から言われていることだが、改めて実感した。すべての生き物は、水無しでは生きていくことはできない。すなわち人間も……。

あの時と同じような異変が今、地球規模で起きている。かつてはきれいな湖だった所が完全に干上がり、あとかたもなく消えてしまったというニュースも報道された。二年前、危機に陥ったロシアキトンボたちと、現在私たちがおかれている状況は、同じなのではないだろうか。守ったつもりだったロシアキトンボたちが、私たちに大切なことを教えてくれたのかもしれない。

優秀賞（独立行政法人水資源機構理事長賞）

「水の星」地球



奈良県 奈良市立都祁中学校

一年 宮久保 晴 加

中学生になってわたしは、陸上部に入りました。試合が近く、毎日汗だくになって帰ります。お茶を飲んで休んでいると、祖母に、

「はよ体操服、洗濯機に入れや。」  
とせかされます。

「今は便利になったなあ。昔は、たらい持って川へ洗濯しに行っていたのに。」

と祖母は言います。わたしは、桃太郎の昔話みたいとおかしくなりました。それにしても、昔の川は洗濯できるほどきれいだったなんて。

わたしが毎朝学校に行くときに見る川は、にごっていたり、ゴミが捨ててあったりして、とても洗濯なんて考えられないのに。祖母は、結婚して初めて洗濯機を使ったそうです。

また、ご飯を炊く井戸水をくむのは、子どもの仕事だったそうです。昔は、水を使うのに大変な労力がいり、子どもも働いていたのです。

蛇口をひねればすぐに水が出てくる今では考えられません。家に蛇口がいくつあるか数えてみると、全部で十以上もありました。わたしは苦勞せずに、その蛇口から出てくる水を当たり前のように使っています。

少し前の新聞に、次のような記事がのっていました。インドのある村の子どもたちは、村に水源がないため、何時間もかけて水をくみに行くそうです。てんびん棒に水がいっぱい入ったバケツを二つぶら下げて歩いている少年の写真もありました。わたしよりずっと小さい子です。わたしが水を出しっぱなしにして歯をみがくと、少年のバケツの半分くらいの水をあつという間に使ってしまうことになりました。新聞にはこんなことも書いてありました。「日本が一年間に輸入する食料や工業製品は大量の水を使って生産されている。それは途上国で十億人が一年間に利用する量に匹敵する。」と。

十億人といえ、ほぼインドの全人口に当たります。ショックでした。水は限りある資源なのに、日本がそんなに使ってもいいのでしょうか。

そんなことを考えていて、ふとわたしは、小さいときからお気に入りのある絵本を思い出しました。その本の名は、「しずくのぼうけん」。村の女の人のバケツから一滴のしずくが飛び出して、冒険をする話です。蒸発して空に上り、雨粒となって地上へ戻ったり、川で魚と鬼ごっこをしたり、水道管を通って蛇口から出てきたりと、いろんな所を旅するのがおもしろくて、何度も読みました。

このなつかしい本を見ながら考えました。わたしが蛇口から出した水は、もしかしたらあのインドの少年が苦勞して運んでいた水だったかもしれないし、わたしの祖母が洗濯に使っていた川の水だったかもしれないと。

地球は、「水の星」と呼ばれていると社会科で習いました。遠い昔から水は、地球を循環し続けてきた限りある資源であり、次の世代に受け継がなければならない大切な財産なのです。また、それは日本人だけでなく、地球上のすべての人や、生き物たちが共有しなければならぬものです。

わたしは、中学生になったのを機会に、もっと世界のことに関心を持ってみたいと思いました。あの記事を読まなければ、わたしは何も知らな

いままだだったでしょう。「水を大切に。」とよく聞きますが、なぜ大切にしなければならないかということが分かれば、みんな、もっと水を大切にしようになるのではないのでしょうか。今のわたしがそうであるように。蛇口から出てくる水は、みんなの水なのです。みんなが水に関心を持てば、きっと大きな成果が出るでしょう。わたしたちは、自分の国さえよければという考えを捨て、ぜいたくな暮らしを見直さなければなりません。「水の星」地球を守るために。

優秀賞（国土交通省水資源部長賞）

水について考える

今年の冬は暖冬で、雪があまり降らなかった。去年は歩くことも困難なほど雪がつもったのがうそのようである。去年は母が毎日大変そうに雪かきをしていたことを思い出し、私は、

「今年は雪かきしなくていいから、お母さんも楽でいいね。」

と言った。冬の仕事が減って、母も嬉しいだろうと思ったからだ。しかし、母は真剣な顔をして答えた。

「雪かきしなくていいのは確かに嬉しいけど、今年の夏、田んぼにひく水が足りなくならないか心配だよ。」

私の家は稲作で収入を得ている。水が足りなくなり、米が育たなければとても困る。私の家だけではない。近所の人たち、紫波町の人たち、日本中の農家の人たちみんなが困ることになる。梅雨の季節や大雪なんてうつつうしいだけだと私は思っていた。水が足りなくなった時のことなんて、考えてみたこともなかったのだ。母の言葉を聞い



岩手県 紫波町立紫波第三中学校

三年 藤原香織

て、私は改めて、梅雨の時期の雨も、冬の大雪も、私たちに必要なものだと実感した。

私が住んでいる地域は『水分』<sup>みずわけ</sup>という。名前の由来について、小学校でも学んだのが、うろ覚えだった。もう一度父に聞いてみた。父は、二つのことを教えてくれた。

一つ目は、わき水があること。水分には、『あづまね山』という山があり、山のふもとの方から水がわきでている。私の家の水道から出る水も、このわき水だ。小さい頃からずっと飲んできたので、よくわからないが、大きな街の水よりずっとおいしいらしい。

二つ目は、昔、水げんかという水を取り合う争いがあったこと。今から四百年ほど前、水田にひく水がなくなり、米がとれなくなった。そしてさらに日照りが続き、稲はどんどん枯れてしまった。その結果、村人たちが水を取り合うことになり、水げんかがはじまった。こ

の水げんかは三百年以上も続き、たくさんの人が亡くなったという。志和稻荷神社には、けんかの時に耳が欠けてしまったお稻荷さんの像が、そのまま残っている。このけんかを終わらせるために、農業用水専用のダムがつくられた。山王海ダムである。ダムができてからは水田に水がひけるようになり、水をとり合うことはなくなった。このような出来ごとから、私の住んでいる地域は『水分』と呼ばれるようになったらしい。

水分には今も、たくさんの水田があり、稲作が行われている。昔とちがいが、蛇口をひねれば田んぼを水で満たすことができる。そのおかげで稲は元気に、立派に育つ。私の家は農家なので、それを身近に感じることができる。春、種をまく。芽が出たら毎日たっぷり水をやる。そして、大きくなった苗を田に植える。その苗が夏には三十センチほどに大きくなり、秋には穂をつけて、重そうに首をたれる。私は毎年、この様子をすぐそばで見ってきた。稲の成長から季節の移りかわりを感じとってきた。水分にはショッピングセンターも遊園地もないけれど、こんなにはすばらしい田んぼがたくさんある。私は小さい頃から、田んぼがあつて、収穫した米を食べることをあたり前のようになら、田んぼがあつて、昔は、人々が命をかけて水をとって合っていたこと、そこからダムがつくられたことを知り、さまざまな歴史の上で、今の生活が成り立っているのだと感じた。

水分という、水が支えてくれている地域を、そして、支えてくれている水を含めた自然をこれから大切にしたい。

優秀賞  
(全日本中学生水の作文コンクール中央審査会特別賞)

## 水の「ありがた」味<sup>み</sup>

今年の三月、以前アメリカからうちに来ていた留学生が能登半島地震のボランティアを紹介してくれた。すぐに軽い気持ちで参加することを決めた僕に、夏になるとたびたび水不足になるアリゾナ州出身の彼女が釘を刺す。

「追伸

あと、現地では水が出ませんから、たくさん水を持っていかないといいません。」

現地の断水については新聞やニュースで取り上げられていたため、ある程度は知っていた。しかし、自宅で蛇口をひねり、勢いよく水が流れ出すと、そんな意識は水と一緒に流れてしまった。

当日、集合場所の金沢市内にある産業展示館から、シャトルバスで三時間ほどかけて現地へ着いた。そこには思っていたよりはるかに過酷な現実があった。半壊もしくは全壊状態の家屋が並び、道路には



愛知県 愛知教育大学附属名古屋中学校

三年 荒木健吾

数々の亀裂が走っている。やはり水の事情も厳しい。給水車が忙しく出入りをし、公民館の外にあった蛇口を回してみても、キーキーときしんで悲鳴をあげているようだった。

そんな環境の中でボランティア活動は始まった。まず住民のトラックからガラス、ドア、テレビなど様々なゴミを下ろす。次に可燃と不燃、電化製品などに分別する。そして最後には、それらを収集車に積み上げる。こんなサイクルを約五時間繰り返し。軽い動機で参加した僕にとって、この「ゴミの片付け」は大変なものだった。春とはいえ初夏と変わらないような暑さの中で、ゴム手袋やマスクをつけているため、汗が体中から噴き出す。前日には、水を十分に補給せず、作業中に足がけいれんしてしまい、救急車で運ばれたボランティアがいたと聞く。

作業も終盤に差し掛かろうとすると、留学生からの忠告が身にし

みた。

「水がない！」

二リットルあれば十分だと考えていたが、思いのほかの重労働で、飲んでもすぐに汗として流れ出てしまった。また、手洗い場には行列ができていたため、飲み水で手も洗ってしまった。ペットボトルからしたり落ちる雫を舐めているときだった。

「よかったですらどうぞ。」

同じボランテアに来ていた人が声をかけ、水を差し出してくれた。とにかくお礼を言って、ゴクリと飲んだ。夏の暑い日の運動後に飲むのと同じような、体中が潤っていくのを感じる「おいしい」味だった。さらに、この水はおいしいだけでなく、今まで初めて体験する、こんな環境の中だからこそその「ありがたい」味がした。

住民から運ばれたゴミの山の中には、珍しそうなウミガメのはく製や、木箱に入った高価そうな陶磁器がガレキと一緒に捨てられていた。逆に、僕たちの日常で無限に手に入り、タダ同然だと思っていた水道の水は、とても重宝されていた。今回の経験は厳しいものであったが、そのおかげで、水が宝物であることに気づくことができた。

再びメールが来た。彼女の故郷、アリゾナでは砂漠化が進んでいるらしい。驚いた。しかし、いきなり国境を越えた砂漠化と言われても一体僕に何ができるのだろうか。

「ジャー」

妹が水を流しっぱなしで手を洗っていた。

「止めなよ、早く。」

僕は急いで、そして少し強めの口調で叫んでいた。

守りたい！水の生まれる場所

青森県 八戸市立明治中学校

三年 熊野 翔一

「おい、翔、ゆうべわらびが夢さ出だった。」

毎年四月になると、祖父は山菜採りに出かけたくてそわそわし始める。今年八十一歳になる祖父だが、山に入るとその足どりはぼくよりもしつかりとして、軽やかで、いつも不思議に思う。祖父は山の空気を吸えば、元気がもりもり湧いてくるのだそうだ。山菜を良く知る祖父は、次々と腰かご一杯に採っていく。落ち葉や草でふかふかの足元に気をつけながら、ぼくは追いつくだけで精一杯だ。一歩一歩踏みしめるたび、辺りに青く深い森のにおいが立ち込める。しつとりとした空気に包まれながらしばらく歩けば、気持ちの良い汗が出てくる。祖父が言うように、山の空気には心にも体にも染みってくる最高の酸素があると全身で感じる。

歩いていると、チヨロチヨロとかすかな音が聞こえてくる。その音のする方を見ると木立ちの合い間の山肌から、にじみ出るような一筋の水。ぼくの目はその流れに釘づけになり、近付いてみると思わず手の平に集めたくなるような、美しい水だ。まるで、今、生まれたばかりのように見える。その水は、手の平がキーンと痛くなるくらい冷んやりしていて、ゴクンと一口飲んだだけで、「うまい！」

と、言葉が出てしまう。ほんの一口の水に、こんなに強烈に感動するとは、自然の存在の大きさは、はかり知れないと思う。

地球温暖化対策の番組で、森の大切さを知る機会があった。森は地球のリサイクルセンターだということだ。木の葉は二酸化炭素を吸収し酸素をはき出す。森の中の落ち葉や枯れ枝や動物のフンや死がいは、ミミズやダンゴ虫など、土の中の生き物が食べたりかじったりして碎き、それを微生物が分解し、植物の養分として土に戻す。豊かに育つ樹木は地球環境を支える大黒柱なのだ気づいた。ま

た、森の腐葉土はスポンジのように水をしみ込ませるため、降った雨をダムのように蓄えておくことが出来る。自然のダムのおかげで大雨が降っても洪水にならず、水不足を防ぐことができるそうだ。おまけに腐葉土にしみ込む過程で、雨はろ過されてきれいになってしまうというシステムになっている。また、木の根は地下で、土や岩をがっちりつかむように張りめぐらされるため、土地はそう簡単には崩れたりしないのだ。木も、虫も、動物も、微生物も、生きながら地球を守っているのだ。たとえ死んでも、何かの養分になって命は形を変えて生きている。誰かに、そうさせられているのではなく、ごく自然にリサイクルしているのだ。

人間はどうだろう。地球に生きるものとして、人間だけがありがたみで足りず、不自然に都合の良い状態を作り上げ、地球のリサイクルのバランスを崩してしまった。便利さ、快適さを求め過ぎて、森林伐採、ゴミの処理など、恐ろしいくらい、地球を壊している。そういう自分も、自然の中に放り出されたら生きていけないだろう。残念ながら、そう簡単には、自然の一員にはなれない。でも、小さな自然を守ることはできるのではないか。

祖父が連れて歩いてくれる先祖からの山。山菜やきのこが生きて育ち、降り注ぐ雨をあまさずしつかりと受けとめる森を、樹木を、大切にしておくために、もつと自分から山に関わっていかうと思う。山を歩いてみなければ、大切にしたいと思う気持ちもそれほど強くは起きなかつたかもしれない。蛇口をひねればいつでも水は出てくる、という便利な生活に感謝しながらも、山に流れる一筋の湧き水の存在を、強く意識していきたい。

人間が何億というお金をかけて創り上げるリサイクルシステムを、自然はありのままですべてのける。美しい水を生み、地球環境を守る森を大切にして、春を待ちこがれる祖父のように山や、自然を体一杯味わいたい。

## 自然の恵

岩手県 軽米町立小軽米中学校  
一年 梅 木 大 幹

ぼくの家では、家から南に十メートル離れた場所からわき出ている井戸水を、飲み水などの生活水として使っている。とてもおいしくて体にいい水だ。

ぼくが住んでいるのは、岩手県北にある軽米町の米田地区という所だ。水道の普及が遅く、ぼくが小学校二年生の時にやっと各家庭に水道が普及した。それまでは、それぞれ家庭で井戸をほって、生活水として使っていたそうだ。

祖父の話によると、井戸水をほる時は、小軽米の月山神社の神主さんに、どの方角にほれば良い水がでるか聞いてほったという。ぼくの場合、神主さんは「家から南に十メートル離れた所に絶えることのない水が湧き出る」と教えて下さり、その通りにほったところ、コンコンと湧き出る水にいきついたそうだ。おかげで我が家の井戸水は、どんな暑い日も続いても、水が枯れることなく今現在も湧き続けている。

この井戸水のありがたさを知ったのは、ぼくの母がぼくを産んだ時の話を聞いた時だった。

あれは小学校の高学年の頃だった。ぼくが水を飲みながら「この井戸水じゃない方の水、まずいね。井戸水の方がおいしいね。」

という、母が当時のことを教えてくれた。母は出産時の多量出血が原因で、起き上がれないほどひどい貧血になり、とても大変だったそうだ。一日二回の鉄剤の注射や飲み薬で治療するもの思ったような効果は上がらず退院するまでに貧血はよくならなかったそうだ。その後母は退院し、自宅で、療養することになるが、病院からの薬にも期待できず、毎日寝て暮らしたという。ところが自宅の井戸水を毎日飲んでいたら、貧血は徐々に快方に向かっていった。その回復力に、病院の先生も、とても驚いたそうだ。

その後保健所で井戸水の成分を調べたところ、この水には鉄分が通常より多く

ふくまれていることがわかった。その時ぼくは小学生だったので、ただ漠然と、井戸水は自然の恵の水なので、体に良い成分がたくさんふくまれているのではないかと思っていた。後で知ったことだが鉄分の多い水は豊かな森林のある地域の地下からしか検出されないそうだ。森林が豊かな水を育くみ、その豊かな水は地下を通って海に流れ、海そうや海の生き物を育てる。岩手の三陸の海の幸が豊富なのもこのためだろう。ぼくの地区の水は母の健康を守っただけでなく、岩手の産業まで支えているのだ。豊かな海の資源でぼくたちは、豊かな生活を送ることができるのだ。

自然の恵はぐるぐる回って命をつないでいるのだと改めて考えさせられる。この他にも我が家の井戸水は夏に冷たく、冬に温かいという特徴があるし、どんな大雨が続いても水が濁ることがなく、きれいに澄んだ水が湧き出る。自然の恵の水には、ぼくが考える以上にすごい力があると思う。

水は、ぼくたちの生活になくてはならないとても大切な資源である。ぼくたちが健康で元気に生活できるよう、とても大きな力をもっている。この大切な自然の恵をいつまでも大切に、未来の子供たちに引きついでいかなければならないと思う。そのために、今ぼくたちにできることは何だろうか……。

一滴の水にも感謝しながら、大切につかう努力をしなければならぬと思う。自然の恵には限りがあることを常に考えながら生活していきたい。

## 水の恵みをうけて

福島県 須賀川市立西袋中学校

二年 鈴木 宗一郎

「水はいつ来るのかなあ。」  
そう父がつぶやきました。

五月の連休前、僕の家では毎年、この時期になると田植えが始まります。

そのときに必ず食卓で聞く言葉です。なぜかを父に尋ねると、  
「それは、水路に水が流れることだよ。家の田んぼの水はすべて水利組合が管理することになっているんだよ。今年は特に雪が少なかつたから、水が来るのが遅かつたんだよ。」  
と、言いました。

毎年、この「水はいつ来るのかなあ。」の会話の後の次の週の週末ぐらいに田植えを行い、僕も去年からそれを手伝うようになりました。

田植えをするときに、この小さな苗がああなるんだなあと思うと、なんだか不思議な気持ちになります。

あたり前のことですが、田植えの前には、田植えの準備をしなければなりません。まず平べったい長方形の形の箱に土を入れることから始まり、小さな種をまき、またその上に土をかけます。この作業は毎年姉を除いた一家全員でやっています。その後それをハウスに入れるわけですが、家では毎年、このころ前年の十一月頃に解体したハウスをもう一度組み立てて、そこに苗箱を入れておきます。その後、苗に水をかけるのです。二、三回、父と一緒に水かけをした時に疑問に思ったことがあります。それは苗にたくさん水をかけることですか。ひまわりなどは水をかけすぎると悪いのにと驚いてしまいました。父に聞いてみると「これくらいやらなきゃだめなんだ。」

と言われました。僕はこの言葉を聞いて、やはりおいしい米をつくるには多くの水が必要になるんだと改めて実感しました。

このようなことをした上で田植えをやりますが、これも水がないとできません。

ん。

家の田植えは、父と祖父が機械に乗って、僕と母と祖母が機械に苗箱をのせる役です。僕は毎年これくらいのことしかできませんが終わった後、まんじゅうを食べながら田んぼ、そしてその脇の水路を流れるきれいな水を見ると、満足した気持ちになります。

その水を見ていると、この水がないと作物が作れないんだなあをつくづく感じます。もしも水がなかつたら、米はつくれません。それでは日本人がお腹いっぱいご飯を食べることができないはずがないと思います。

僕は都会では水が汚れていることもあり、飲み水があまりおいしくないとよく聞きます。しかし、僕達の住む福島県は、水がきれいでとてもおいしいのです。また、日本は水に恵まれています。世界の国々と比べてみると、コップ一杯の水が他の国ではかけがえのない水なのです。そのかけがえのない水をどのように使うか、それが僕達の今後の課題だと思います。

水をきれいにするために、僕は小さなことからやるのが大事だと思います。僕たちが身近なことでできることは、川にゴミを捨てない、できるだけ生活排水を流さないようにするなどですが、この小さなことをみんながやったらとしましう。そうすればかけがえのないきれいな水は守られて、米を主食とする日本人らしい食事がいつまでもできるようなことになると思います。

水がやつと来たのは一週間前です。今年の田植えは例年より少し遅くなりました。しかし、来週にはすべての田んぼの田植えが終わると思います。もうしばらくすると、毎朝、学校に向かいながら目の前に広がる田んぼの景色が眺められます。一日一日の稲の成長と、秋の豊かな実りを想い、僕はまた自転車を走らせたと思います。

## 限りある大切なもの

群馬県 群馬大学教育学部附属中学校

三年 宇津木 尚 子

小学校最後の夏のこと。お盆で特に予定がなかったので起床時間は遅めであった。目覚めたとき、既に両親は仕事で家を出た後だった。

「あれ？水出ない。」

顔を洗おうと思ってひねった蛇口から水は一滴も出てこなかった。キッチンの水もお風呂の水もやっぱり出てこない。寝ぼけていた私でさえ一瞬で目が覚めた。

同時に私の頭の中に様々な不安が過る。トイレに行きたい。でも流す水は？歯磨きは？お風呂はどうするの？洗濯は？

そういえば母が「水が出なかつたら外の水道へ行きなさい。」と言っていた様な気がした。何で外なんだろう、とブツブツ言いながら階段を下りた。そこで外水道の前にある社宅の掲示板が目があった。そこには「貯水タンクの修理のため、九時～十七時まで水が出なくなります」と書いてあった。

「なんだ、よかった。たったの半日だ。」

その時、私は半日の水無し生活を軽く考えていた。外水道が使えらるならバケツに汲んでくればいいや、と先ほどの不安はどこへやら。

ところが、歯磨きをしたり、洗顔をしたり、食器を洗ったりと意外に普段の生活に水を要することに気がついた。バケツを片手に半日で社宅の二階まで階段を何往復もした。修理が済み、蛇口からきれいな水が出るまで沢山の水を流した。水無し生活を甘く見ていた自分の愚かさに腹が立った。

「水を大切にしましょう」生まれてから何回聞いたことか。勿論、分かったつもりでいた。だが、頭の中で分かっているも実際困ってみないと本当の水の有り難さに気付いていなかったことを痛感した。バケツを運んでいるとき、私は自分自身がいかに今まで水に対して無神経だったか思い知った。食器洗いで水を出し過ぎたこと、スイミングのシャワーで遊んだこと。それらの無駄にしまった水

のことを思い出し、後悔した。

最近、水の大切さについて改めて考え直した。水は、雨が地面にしみ込み地下水となることで生まれる。地下水は川へと流れ込み、人の手で浄化処理されたものが私たちの家庭に届けられる。日本は海や川などの水質資源に恵まれているため、日本人はそれをごく当たり前のこととして捉えている。しかし、何日もかけて遠くから水を運び生活している国の存在や、水不足のニュースを聞くと「水のある生活」は決して当たり前ではないことに気づかされる。むしろ、水は高価なブランド品にも勝る価値があるのではないかと思える。

あの夏、ほんの半日であったが、私は「水のない生活」の体験を通して、身近な存在であった水の大切さに気付くことができた。いつでも水が近くにあるなんて思っただけではない。そう実感して以来、水の使い方を考えるようになった。家では、流すにはもったいない食器や洗濯のすぎ水は、ペットボトルやバケツに入れておき、植木や家庭菜園、打ち水などに利用している。少し気をつけるだけで、水の無駄使いをせずに済む。節水することで、逆に心は豊かになるような充実感も覚えた。これからは家だけでなく、学校でも節水を積極的に行なっていきたい。

人間は、高価なもの、珍しいものに価値があると思ってしまう。そして、本当に価値があるものは、実は当たり前だと思っただけの中にこそ潜んでいるのかもしれない。それを探するのは決して難しいことではない。

「水は大切です」そんな聞きなれた言葉の意味を改めて噛み締められたのは、あの夏の出来事だった。

## 櫟は我が家の井戸の守り神

埼玉県 鶴ヶ島市立鶴ヶ島中学校

二年 山田 祐梨子

「今年も、いい新茶ができるよ。」

私の祖父の生きがいは、井戸水を使ったお茶作りです。気温が高くなるとお茶の木には大量に必要で、ますます祖父の仕事は忙しくなります。晴れた日が続き、祖父の水やりはさらに忙しさを増します。

私の祖父は、「お茶の木は、井戸水に限る。」と、井戸水にこだわり使い続けています。祖父が使っている井戸水は、主に飲み水、洗濯、風呂、トイレの水として使われています。祖父の井戸は、実に不思議な井戸です。十メートル程度の浅い井戸なのに、三百年以上涸れたことがないそうです。三十年前、祖父の井戸を取り囲むように市の深井戸が掘られた時、他の家の井戸は涸れたしまったそうですが、祖父の浅井戸だけは涸れることがありませんでした。

祖父の井戸が、どんな日照りの年でも涸れないのは、祖父の井戸の裏手に小さな秘密が隠されているからです。その秘密というのは、一本の櫟の大木です。祖父は、

「櫟は、水をよび寄せてくれる。櫟の大木の根が砂利層まで伸びているので、砂利層を流れる大量の水が櫟の根に吸い寄せられ、その一部が井戸に湧き出すんですよ。」

と教えてくれました。櫟の木がそばにあるだけで井戸水が湧き出すなんて。私は、櫟と井戸の関係をもっと知りたくなりました。祖父はさらにこんな話をしてくれました。

「櫟が、水を欲しがれば欲しがるほど井戸の水はいい水が湧き出すし、櫟の活動が止まると水は櫟が井戸に戻してくれる。」

祖父の話聞いて、私は、井戸が三百年もの間涸れることなく生き続けた理由を、ようやく理解することができました。そして、改めて井戸を守るためには、木を

大切にする必要があると思いました。

しかし、鶴ヶ島では、櫟だけでなく多くの雑木林の木は切られ、その面積は年々減少しています。このまま木が切られ続けると、井戸の水だけでなく鶴ヶ島にある太田ヶ谷沼、池尻池などの池は、逆木池のように死の池になってしまうかもしれません。川蟬のやってくる美しい池だった逆木池が死の池となってしまった原因は、池の周辺の雑木林が道路を造るために切られ、地下からの湧き水が途絶えたことが原因でした。

川のない鶴ヶ島では、木の中でも櫟や榎などの広葉樹が水を生み出す大切な役割を果たしています。雑木林に降った雨が、少しずつ地下水となって池や沼に湧き出す鶴ヶ島では、一本一本の木を大切にすることが、水を大切に繋がるだけに、一本一本の木を守ることはとても重要です。

そして、もう一つ水を守るためにしなくてはならないことがあります。それは、井戸のケアです。祖父は、年に一度ポンプで水を汲み上げ、井戸を空にしてから底の清掃をします。清掃が終わると、砂利層から再び美しく澄んだ水が染み出して井戸はよみがえります。まるで、井戸は生き物です。私は井戸をケアすることが、井戸を長生きさせ水を守ることもなると考えています。

祖父の家の周辺にある市の五本の井戸も、大切に守られています。一本の井戸の水を汲み上げて水がなくなると、井戸を休ませ次の井戸の水を汲み上げ、なくなると休ませ、次の井戸を汲み上げるといふ地下水に負担をかけない方法が取られています。

私は、井戸水が大好きです。その理由は、人や自然にやさしい水だからです。人や自然にやさしい良質な水を恵んでくれる井戸水が櫟や雑木林と共に残され、いつまでも守り伝えられること、それが私の願いです。

## 丹沢にて

神奈川県 葉山町立葉山中学校  
三年 森川 愛美

丹沢の春は生命の輝きに満ちている。春爛漫。木々は芽吹き、草の芽は伸び、花の蕾は膨らんで、どちらを向いても「山笑う」という言葉が実感として迫ってくる。私を空を仰ぎ、風を感じて足取りも軽く、春の森を行く。ブナの林を抜けると、ひんやりとした空気が漂い水音が響き、あちらこちらに小さな滝が現れる。丹沢の語源は谷沢から来ているらしく、この森にはたくさん滝がある。丹沢連峰の雪解け水を集めて、水源の森は、今年も息を吹き返す。

私はこの連休、神奈川の水源地丹沢を歩いてみた。せせらぎの音が耳に心地よい。清冽な水に手を浸しながら、この水の行方を考えた。小さなせせらぎは、やがて大きな流れとなり、ダム湖に注ぎ込み、上水道、防災、発電等に使われる。そう、この水は私たちの生活そして命を支えているのだ。

地球は水の惑星といわれるが、実はその内九十七％は海水で、淡水は三％その中で実際に使える水はわずか、〇・一％にすぎないという。改めて数字で見ると、まさに限りある資源である。その貴重な資源を無駄なく利用し、再び地球に戻す役割を、私は果たしているだろうか？—実を言うと身近にそれを実践する人がいる。祖母は、とにかく非常に水を大切に使う人で、彼女は広島県と島根県の県境の中国山地のど真中にある農村で育った。水道はなく、風呂は近くの沢から汲んできて沸かし、洗濯は湧水で手洗い。台所で使う水は裏の井戸から汲んできて甕かめに溜め、大事に大事に使ったそう。つまり無駄がない。必要な分だけを必要にだけ使う。そして使った水は感謝して最後まで使い切る。台所で出る米のとき汁などの生活排水は多量の有機物を含んでいるため、大事に取っておいて、肥料として使う。今でも祖母は牛乳瓶を濯いだ水を植木鉢にかけている。どうしてももったいないと思う癖が抜けない。トイレも今はレバーを引けば何もなかったようにきれいにさっぱり洗い流してくれるが、昔はこれも立派な肥料だったんだよ。と祖母は憤慨したように言う。「大体、排水を廃水といっしょにして

しまうのが良くない。大事な物を簡単に捨て去って良いものかどうかをよく考えてごらん。」—昔の人は環境に優しくかったのだ。

いつもシャワーのお湯を使いすぎと母に怒られている私は返す言葉が見つからない。玄関前に打ち水をした祖母宅の涼しい部屋で、私はひたすら反省する。この打ち水も生活の知恵である。玄関に水をまくと温度差が生じて風が起り、家を通り抜ける自然のクーラーとなる。そしてもちろんこの水は雑巾を絞った掃除の最後の残り水なのだった。

日本人はよく水はタダだと思っていると聞かれるが、水が限りある資源である事に気付いている人が、果たしてどのくらいいるのだろうか？現代は上水・下水道共に整備され、水は見えない存在になっている。便利で快適だが、見えない事が「無関心」につながっているとしたら、それは恐ろしい事だと思う。

今地球の環境破壊についていろいろ取り沙汰されているが、新聞で半世紀前オリンピック会場だった湖が干上がってしまったという記事を見た。一方で間もなく海中に沈んでしまう島国があるという。我々の星は一体どうなってしまうのだろう。太古から大地には川が流れ海に注ぎ、中には水が廻っている。このバランスを崩す事が地球の破壊につながるのなら、一刻も早く止めなければならぬ。

地球の声に耳を傾け「自分は今、水を使っている。」という意識を持って行動する。自分自身の責任を自覚する事が限りあるあらゆる地球の資源を守る事になると思うからだ。

なみなみと青い水を湛えた丹沢湖。湖面が煌めき歓声が響く。ボート遊びの親子が通り過ぎる。この幸せな光景を未来の子や孫まで伝えていきたい！と私は強く心に誓った。

## 水―そのいのちを見つめて

富山県 氷見市立南部中学校  
二年 水上 瑛 麻

「だ、誰か、助けて……。」

夏のある日のこと、突然、悲痛な声が私の耳に入ってきた。母と顔を見合わせて、不思議に思いながら出てみると、一人のおばあさんが我が家の玄関から廊下に倒れ込んでいた。

「どうされたんですか！」

母が、驚いてたずねた。

「道、歩いとつたら急に苦しくなって……。気の毒やけど、救急車、呼んでもらえんけ、そ、それと水、水一杯もらえるかね……。」

おばあさんは、ハアハアと息をはずませながらそう言った。顔色が悪く、手もブルブルと震えている。「熱中症かも……」とつさにそう思った。何しろものすごい暑さだ。ちよつと外へ出ただけで頭がくらくらする。特に老人の身には、かなり応えたのだろう。

母も事態を察し、すぐに救急車を手配した。そして、少しでもおばあさんが楽になるように衣類をゆるめてあげたり、周りを涼しくしたりした。私は急いで台所へ走り、コップに冷たい水を注いでおばあさんに手渡した。おばあさんは、ゴクゴクと一気に水を飲み干し、

「ああ、おいしい。本当においしいわ。ありがとう、ありがとうね。」

と言いながら大きく息をついた。少し落ち着いたらしく、震えが治まってきている。「よかった」心からそう思った。

やがて、救急車が到着し、母がそれまでのいきさつやおばあさんの病状を説明した。そして、おばあさんは私たちが見送る中、無事病院へ、搬送されていった。「どうか、早く元気になって！」私は、その後ろ姿にその声をかけて祈った。

二、三日後、我が家に一人の来客があった。あのおばあさんの御主人だった。御主人は、お陰様でおばあさんがすぐ回復したこと、やはり、軽い熱中症だった

こと、水を飲ませてもらったり、手際よく介抱してもらったりして、本当に助かったことなどを話された。特に、

「水を飲ませてもらわなかったら、どうなっていたかわからない。」

と、何度も何度も御礼を言われた。私は母と二人で、おばあさんが元気になったことを、手を取り合つて喜んだ。そして、たった一杯の水が、日頃、何気なく思っていた水が、一人の人間の命を救ったことに、深く感動した。

「蛇口をひねれば水が出る」私は今までそれをごく当たり前のことのように思っていた。しかし、この事件があつてから私はつくづく、水の大切さ、有難さを思い知らされた。

日本人の大多数は、水道水を生活用水として使っている。その量は、一人一日あたり、三百リットルにもなるという。その水道水は、自治体が管理、運営する浄水場で、きれいで安全な水に変えられ、上水道を通じて私たちの家庭に送られてくる。私たちはその水を、惜しげもなく存分に使っているのだ。

水の専門家によると、人間らしい生活をするためには、一人一日あたり五十リットルの生活用水が必要らしい。しかし、その数値が三十リットルにも満たない国々が、アフリカには二十六か国もあるという。いかに、私たち日本人が恵まれているかがよく分かる。

けれども、もしその水がなかったら、私たちはどうなるのだろうか。風呂にも入れない、トイレの水も流せない、いや、その前に、飲み水さえ確保できなかったら、体は衰弱し、やがて死に至るだろう。そう考えると、水は私たちの命を支えているのではなく、水そのものが、私たちの「いのち」なのだ。

今、一部の人が地球の現状に気付いても、私たちみんなが気付かなければ「いのち」は守れないと思う。だから、一人一人が持たなければならぬ。水といういのちを、確実に未来に残そうという心を……。

## 唯、一つでいい、それだけでいい

山梨県 駿台甲府中学校  
二年 副島 七海

人間にとって必要不可欠な水。水は、自然の力によって循環する資源だそう  
だ。つまり、水は自然の力がなければなくなってしまう、ということだ。

私達、人間を始めとしてこの地球上にいる生物は水がないと生きていけない、  
ということは誰もが知っている。そうと知りつつも人間は水の源となつて自然の  
力を徐々に壊している。つまり、環境破壊をしているのだ。二千二十五年に  
は、世界の人口の三分の一が水不足に悩む状態になると言われているのに、この  
ままでいいのだろうか。いや、いいはずがない。近い将来、水不足に悩まされな  
いために、今私達がしなければならぬことは一体何なのだろう。

幸いなことに山梨県内の水道水は、他県の人からすればとてもおいしいらしい。  
い。何故、山梨の水道水がこんなにおいしい、と言われるのか考えてみた。それ  
は山梨県を取り囲んでいる自然環境による。つまり、南アルプス山系を始めとし  
て富士山など、とても緑深い山々に囲まれている山梨は、広大な自然に恵まれ、  
また多くの水源があるということなのである。

私達は水道水を当たり前に飲み、この味が日本全国共通の味だと思っている。  
おいしい水に恵まれているということは、私達にとってこの上ない贅沢なことだ  
ある。そのことに感謝しなくてはならないのに当然のこととして受け入れている  
のには、少しばかり残念な思いがある。

何故なら私が幼少で福岡に住んでいた頃、水不足を経験しているらしいから  
だ。福岡は水源が乏しく、その上カラ梅雨だったということもあり現存する水資  
源、ダムでは福岡の人口を支えるだけの量は充たされなかったのだ。今さらダム  
を作ったところで即、水不足を解消するというわけにもいかず午後十時以降、水  
が出ないという取水制限を行う状態までいったこともあるらしい。私達家族にし  
てみれば初めての経験であったのだが、福岡では度々あることらしい。「こうい

う経験をする、水のある生活がいかにも恵まれた生活であったかということを感じ  
る。」と、母は語っていた。私の記憶にはその時の苦勞はほとんどないが、話を  
聞く度に水の大切さを痛感する。

また、こんな実話もある。約二十年前、県民の水を貯えるために当時の北巨摩  
郡須玉町（現在、北杜市須玉町）に塩川ダムが建設された。その塩川ダムを建設  
するため曾父母の家は、ダムの底に沈んだ。いくらお金をもらってもお金には代  
えられないその人達の想い出も、また沈んだ。それらの大切なものを犠牲にし  
てまで県民の水の確保にあてたのだ。

地球規模での取り組み、などと大仰なことを言っても仕方がない。水を大切に  
するということ、そんな小さなことからコツコツと、当たり前のこととして実行  
すること。それが必要なのだと思う。何十年後かに故郷の家が自分のもとへ帰っ  
てくるわけではない。もちろん想い出も取り返しがつくわけではないが、百歳を  
過ぎた今も、その土地の近くに住み続けて、水の歴史を見守る人もいる。だから  
こそ、今私達に出来ることをやるしかないのではないだろうか。それは、ただひ  
とつ、水を大切に、自然の恵みをありがたく思う、それでいいのではないだろ  
うか。

水を粗末にするということは、そこに何十年、何百年と生きてきた人の歴史を  
否定することになるのだから、人間としてしてはいけないことであり、その人達  
の様々な思いを無駄にしてはならないと思う。

## 私たちに与えられた背負い水

静岡県 興誠中学校

二年 小林 太士

「一体何をしているんだろう。お茶を飲むなら、湯飲みで飲めばいいのに……。」  
祖母はいつも食後のお茶を、急須から直接、ご飯茶碗に注ぐ。湯飲み茶碗を使っているのを見たことがない。私は今まで祖母のこの行為に違和感を覚えながらも、昔からの習慣なんだろうと思ひ、あえて祖母に尋ねることはしなかった。

しかし、先日何気なくつけたテレビから、祖母の行いに納得した。それは、女優の大山のぶ代さんの「人間の背負い水」という話だった。彼女は、

「人間は、一生の間に使う分の水を背負って生まれてくる。だから死ぬまで使える水の量は一人ひとり決まっている。目には見えないけど、みなさん水を背負っているのよ。」

と優しい口調で語っていた。確かに、理科の先生も授業中に、人間の体内の水分は全体の70〜80%だと言っていた。私の体重は44kgだから、30〜35kgが水分であり、私が背負っていることになる。まさに、人間と水は切っても切れない密接な関係にあるのだ。私たちの体内の水分を、物質的に目に見える水と例えるのなら、大山さんの言う背負い水は、私たちの命を未来へ繋ぐための生命の水であると言える。きっと人が死に直面する時は、背負い水を使い果たした時であり、コップ一杯の水すらも飲めない境遇に陥ったことを意味するのだろうか。

今までに、私は自分自身の背負い水をどのように使ってきたのだろうか。バスケット部の試合や練習中に足を痛めると、大きなバケツに水を張り、その中に大量の水を入れて足を冷やす。そして、足の痛みが引くと、その水や水を無造作に流して捨ててしまう。考えてみると、限られた背負い水にも関わらず無駄に使っていたことになる。足を冷やすならば、大量の水を使わなくても、保冷剤を用いればよい。治療法では変わらないし、冷凍庫で凍らせれば、何度でも使うことができる。また、捨てた水や水の再利用を考えるべきだった。この様な水の無駄使

いの例は、枚挙に暇がない。歯磨きや食器類を洗う時の水の出しっ放し、入浴時のシャワーの出し方や水洗トイレの流し方など、考えれば考える程多くの事柄が挙げられる。蛇口をひねるといとも簡単に水が溢れ出てくるので、水は無限にあるような錯覚に陥っていた。愚かな考えに気付くと、顔を覆いたくなくなった。

「私が今日まで無駄に使った背負い水は、どれだけたくさんになるのだろうか……。」

我が家の周りの田んぼで田植えが始まった。幼い頃、この時期に田んぼへお玉杓子を捕まえに度々行った。ふと思ひ出して、昨日久しぶりに田んぼへ出掛けした。田んぼは一面農業用水で満たされ、苗を植える準備が整っていた。そこでは、多くのお玉杓子やアメンボ、ゲンゴロウなどがスイスイと泳いでいた。その時私は、人間だけではなくお玉杓子などの小さな生物も背負い水を持っていると悟った。お玉杓子が蛙に成長するには、水は不可欠だ。蛙は、常に皮膚がぬれていなければ死に至る。そのうえ体外受精であり、卵は乾燥に弱く、産卵の時は水へ戻らねばならない。つまり、蛙が生きる為にも、子孫を残す為にも水は必要不可欠な存在だ。

祖母が毎食後お茶をお椀に注ぐ行いは、与えられた背負い水を大切に使うことを、言葉ではなく態度で私たちに示してくれた。お茶をお椀に注ぐことで汚れがとれ、お椀を洗う時の水が節約されるからだ。六十歳になる祖母が永い人生を歩む事ができたのも、背負い水を無駄なく大切に有効に使ってきたからだ。父母には洗車・掃除や調理の際の水の効果的な使い方、兄や妹には水道水の上手な利用法を提案した。私は、歯磨きや洗顔やシャンプーの際に「溜め濯ぎ」を実行している。私も自分の水を大切にし、一滴でも無駄に使うことなく生きたい。私の大切な背負い水だから。

## いつまでも同じ気持ちで

静岡県 浜松市立入野中学校

三年 太田 ひより

「さなるこの日」…それは五月の初旬に毎年行われている学校行事だ。その日は、遠足を兼ねて佐鳴湖に出掛け、湖にやってくる渡り鳥を観察したり植物をスケッチしたりする。佐鳴湖は、悲しいことに近年「日本一汚い湖」として有名になってしまった。私達の住んでいる地域では、小学校のときから総合的な学習の時間や行事を通して環境問題を考え、さまざまな活動に取り組んでいる。その活動は、ごみ拾いを行うクリーン作戦はもとより、透視度計を作ったの水質調査、シジミの放流や葦を植えての水質改善、渡り鳥の観察や竹炭作りなど多種多様にわたっている。佐鳴湖とかかわって六年が経つ。でも、何かが少しづつ違ってきている。そんなことを感じ始めていたある日、私は一冊の本を手にした。

「半日村」、その名の通り半日しか日が当たらない村の話。背後に高い山があり、昼を過ぎないと日がささない。村人には元気がなくて作物の収穫も少ない。村人は皆、悪い村に生まれたと諦めている。そんな時、一人の少年が袋をかついで山の上に登り、土を集めて降りてきた。皆「無駄なことだ」と馬鹿にするが、子供達が手伝い始め、いつしか大人達も仕事の合間に手伝い始める。そんな日が、一年、十年、数十年続く。少年の孫やその孫まで続くのだ。そしてついに半日村に一日中日があたる日がやってくるという話だ。

本を読み終えたとき私は「これだ」と確信した。それと同時に自分が恥ずかしくなった。何かが違うと思っていた根源は、私自身にあったのだ。私の気持ちが変わってきたのだ。小学三年生の頃、初めて佐鳴湖について調べた。一見きれいな湖がどんなに汚れているかを知った。驚いた。そして悲しかった。私にも何ができるはずかと思ひ、いろいろなことを考え工夫していた。あの時の思いを私は失っていた。確かに授業の中では、佐鳴湖について考えたり活動に取り組んだりしている。でもそれは、年月が経つごとにうわべだけのものになってしまっ

いた。心のどこかで「どうせ私が頑張ったってしかたないよ」という思いがなかったとはいえない。小学生の私が考えた節水の方法や努力は、たいしたことではなかったが、そのときの思いは「半日村」の少年に通じていた。そして、その思いこそが何よりも大切だったのだと気付いた。

もし水がなかったら…。水のない生活ってどうなるのだろうか、私は試してみた。朝、起きる。喉が渴いているが我慢。歯を磨きたいし顔も洗いたい。トイレに行く。ここでも水が必要なことに改めて気付く。ギブアップ。私の挑戦は、一時間ももたなかった。

蛇口をひねって、いつもの調子で水を出す。三秒ほどでコップから水が溢れる。歯を磨いて顔を洗うまでを五分とする。三秒で二百ml、五分で二万ml、つまり二十ℓ、ペットボトル約十三本の水を無駄にしているのだ。家族五人で計算すれば、約六十五本という想像もつかない量になる。水は限りある資源だ。これでは、半日村が一日村になったのと反対のことを私達はしてしまうだろう。

私達の周りには、当たり前のように水がある。特に私達の住む静岡県は水に恵まれている。だからこそ水に恵まれたことを感謝し、大切にしなければいけないと思う。私の大好きな佐鳴湖。水と緑に恵まれ、季節ごとの草花や訪れる鳥たち、魚や虫。この大切な場所を守っていく義務が私達にはあるのだ。

今、地域はもとより、市や県を上げて佐鳴湖の浄化に取り組んでいる。専門的なことは大人に任せるとして、私は私のできることを続けていこう。それが目に見えて変わっていくことではなくても。そして、水に感謝する気持ちを忘れず、毎日を過ごしていきたいと思う。

## 私と「水の作文」

三重県 皇學館中学校  
三年 奥田千穂

今年も田植えの季節がやってきました。けれども、電車の窓から見える田んぼの景色が去年と違っていることに気付きました。毎年この時期は、水が張られてから稲が植えられていたのに、いつのまにか田植えは終わっていました。そして、その田んぼの水も去年の半分ぐらいで、なんだか稲も元気がないように見えました。

「そういえば今年は、雨が降らなかったなあ。」ふと、頭の中に浮かびました。「水不足」の記事が、新聞に載っていたのも思い出しました。

中学校一年生の時、GWの宿題が「水の作文」でした。「水」といえば、蛇口をひねれば出てくる水道の水しか思い浮かびませんでした。それで、水について書くことに悩みました。どんなことを書けばいいのかわからない私に、「毎日新聞を読んで、水の記事を探してみたら。」と、母が教えてくれました。ちょうどその年は水不足で、ダムに水がないという記事が大きく載っていました。水がないという記事に少しびびくりしたのを覚えています。「水が使えなくなったらどうしよう。」と、改めて水の大切さに気付いた瞬間でもありました。ダムという記事を見て、母方の祖父の家が「君ヶ野ダム」の底に沈んでいると聞き、ダムを見に行きました。ダムがどうやってできたのかもわかりました。私は、とても貴重な体験をしたと感じました。たぶん、この記事を見なかったら、ダムについて考えることもなかったし、ダムが出来るまでの大変な苦労を知ることなかったでしょう。

祖母は、昔の節水の仕方を私に教えてくれました。小学校の時、牛乳パックをバケツの水で洗うのは、当時とても面倒くさいと思っていました。それに、習字の時間にも、筆をバケツの水で洗った覚えもあります。流しを汚さず、水を無駄遣いしないための工夫です。面倒だったけど、祖母の話聞いて、私たちがやっ

ていたことはとても大切なことだったんだと気付きました。もっと真剣に取り組めばよかったですと少し反省しています。

小学校の時、もう一つ水と関わりを持ったことといえば、五年生の時の米作りでした。田植えの時、水田の中に足を入れるのがとても嫌でした。生温かい土と冷たい水の感触が、気持ち悪かったです。けれど、自分が体験してみても米作りの大変さは、実感できませんでした。そして、自分たちで作ったお米の味は、何か普段食べているお米より、おいしかったことを覚えています。でも、もっとおいしいお米を食べた記憶が、頭の中に残っていました。それは、私が四歳の頃、父の転勤で富山にいた時に食べたお米です。富山の水は、きれいなことで有名です。きれいな水で作られた富山のお米や野菜は、とてもおいしかったです。おいしい物を食べると、人は、心も体も豊かになると思います。そのおいしい物を食べるためには、きれいな水が必要だと思います。人は、水なしでは生きていけません。きれいな水なら、きつと体もきれいになるでしょう。きれいな水で作られた食べ物を食べた時、私たちがおいしいと感じることがその証拠だと思います。

三年間、「水の作文」と向き合って、水について考えている内に、いつのまにか歯を磨く時は、水を出しっぱなしにしていたのが、今は自然に水を止めるようになっていました。そして、いつもと変わらない風景の中で、田んぼの水でもきれいだと感じることができる新しい目を持つことができました。なによりも、私の毎日の生活に欠かせない水に対して、感謝をし、大切にすることが、誰に言われるのでもなく、自分自身にしっかり根付いたことは、私にとってかけがえのないものになりました。

## 生命を育てる川

京都府 立命館宇治中学校  
二年 木村 匡 一

僕の家には4匹のイモリがいる。去年の夏休みに兵庫県の氷ノ山のふもとの流れが緩やかできれいな水が流れている水路で捕まえてきた。お腹の赤い模様がおしやれで、黒い眼をくりくりさせながら、手足で水をかいて泳ぐ姿がとてもかわい。せつかく、きげんよく暮らしていたイモリを家に持って帰ったので、毎週水換えをして、きれいな水の中で暮らせるようにしている。最近、メスのお腹が膨らんできた。そろそろ卵を産むかもしれない。

川や湖は、たくさん生き物の生命を支えている。僕の家近くに流れる淀川にもいろんな生き物が生息している。昆虫がいて、カエルがいて、魚がいて、鳥もいる。今は水が汚れて濁ってしまったているが、きつと昔は今よりずっと澄んでいて、もつとたくさん生き物がにぎやかに暮らしていたのだろう。

僕は、ときどき父と一緒に琵琶湖に釣りに行くのだが、面白いほど簡単にブルーギルがばんばん釣れる。うちでは、いつも釣った魚は逃がすことにしているが、ここではブルーギルが釣れると琵琶湖に返さない。外来魚が増えて生態系が変わってきたからだ。周りで釣りをしている人たちも、ブルーギルを釣り上げると、まるで嫌なゴミを釣ってしまったかのように、その生命をゴミ箱に捨てる。本来いるはずのないブルーギルが琵琶湖で増えたのは人間のしたことだ。人間は勝手だと思う。

琵琶湖といえば湖岸に生える葦が有名だ。ふつうは「アシ」と読むはずだが「悪し」という響きが良くないから「善し」(ヨシ)と呼ぶようになったらしい。これも人間の勝手だが、ちよつと面白い。葦などの植物や水草が水辺に生えているおかげで、イモリやカエルやメダカなどの小さな生き物が卵を産むことができ、赤ちゃんが育つ。ところが僕の家近くの淀川には、葦は生えていない。淀川の下流では、川を制御するための護岸工事で岸はコンクリートで固められてい

る。川は安全だけでも川辺には草は生えない。昆虫や魚の隠れ家や卵を産む場所がなくなってしまった。人間が生き物の居場所を奪ったのだ。

虫も魚も鳥も動物も自然の中で自然に暮らしている。人間だけが自然をコントロールしようとしている。人間はそんなに偉いのだろうか。「人間は考える葦である」という言葉がある。父が説教のときによく使う。その意味は「人間は自然の中で生かされている、たくさん葦の一本みたく特別な存在ではないのだから、決して思い上がってはいけない。しかし、人間は考えることができる存在だから物事をよく考えて行動しよう」ということだ。生命を支えている川や湖の水や、水辺に生える葦などの植物の役割のことを考えていると、偶然かもしれないが「人間は考える葦である」という言葉の重さを僕は感じてしまう。

僕の家近くの水路にはイモリがいない。家庭の排水やゴミが流されて、水の表面には油の虹が浮かんでいる。その水は淀川や寝屋川に流れ込んでいる。環境破壊。それは人間がしたことだ。そして、自然を守ることが出来るのも人間だけだ。

僕は、川や湖の水はただきれいであればよいのではなく、魚や昆虫が植物などの育む生命の水であってほしいと思う。我が家で飼っているメスのイモリがやがて産卵して、赤ちゃんが大きく育ったら琵琶湖か淀川に放そうと思っている。その小さな命が自然の中ですくすくと育って欲しいから、僕たちは一人一人が川や湖をきれいにするために考える葦にならないといけないのだと思う。

## 生命の母なる“水”

大阪府 堺市立三原台中学校

二年 佐藤 優衣

私達の生命の源とも言える“水”について私が深く考えるようになったのは、神戸に住む祖父母から震災の話を書き始めてからである。十二年前の阪神大震災の際、私の祖父母は被災し、近くの小学校の体育館で、数ヶ月間過ごす事となった。ライフラインは全てとまり、もちろん水も自由には使えなくなつたそうだ。配水車の場所まで何度も大きなポリバケツを持って往復したと言う。その頃、私たち家族は千葉県に住んでいたもので、地震の事を知った父は、ナップサックにペットボトルの水を詰められるだけ詰めて神戸に向かった。だから今でも神戸で被災した人達は、水を大切に思っているそうだ。この様に、よほどの体験をしない限り、水が私達の生活に欠かす事のできない大切なものという意識は薄いかもしい。

年々、海や川の汚染は進み、私達はもつと自然について考えなければならぬと思う。では、生命を育くみ、支えてくれる“水”、貴重な資源とも言える“水”をどうしたら美しいまま保てるのだろうか。

私が以前に読んだ本で、北海道の漁業地のお母さん達が海を保全するために起こした運動のひとつで「植樹運動」というのを紹介していた。海の環境問題なのに何故、植樹？と思ってしまうかもしれない。だけど、日本の様に山の多い国では“森”というのが水のために非常に重要になってくるのだそうだ。

そこで私は、森と水との関係について調べてみた。森林は、酸素の供給・防風・防雪の役割の他にも、大気浄化・騒音防止・山崩れ防止・水源涵養の大切な役目をはたしている。水というのは地球上を循環しているものでもあるので、森ができていない時の水はただ激しく地上に降り注ぎ、流れだし、その為さらに沢山の

水が蒸発して常に嵐と集中豪雨の繰り返しになってしまう。ところが森があることで、なだらかな循環になっていくので気温が緩和される。だから、植樹し、森を大切にする事が、地球環境のバランスを保つことにつながるのだそうだ。

きっと北海道の漁業、“浜の母さん”たちは、この事に気がついて植樹運動をすすめてきたに違いない。もちろん、いつも自然にたよるばかりでは不都合も生じ、人工的なダムも必要となってくるだろう。だけど、やはり一番大切な事、私達が今すべき事は、地球環境を守ることなのだと思う。人間が自然の支配者となつてはいけないように思う。「森」と「川」と「海」、どれをとっても水にとつて大切な環境で、これらの一つでも汚れたり壊れたりすれば全てが崩れてしまう。それを起こさないようにするためには、やはり日々心がけて生活することだと思う。

蛇口をひねればいつでも水がでるといふ安易な考えは捨て、私達一人ひとりが水について深く考えるべきだと思う。それに、自然がなければ私達は水を使ったり、さらにはこの地球上に誕生することさえできなかっただろう。だからこそもつと自然の恵みに感謝し、命の象徴でもある“水”を大切に守っていきたく私は思う。私達人間は自然の恩恵をうけて日々を過ごすことができるのだから……。

## 私の夢

島根県 隠岐の島町立西郷中学校  
三年 毛利侑紀

隠岐はとても自然が豊かな島です。緑豊かな山、蒼々と澄んだ海。しかし最近になってその自然が次々と破壊されています。

私の家は八尾川の直ぐ近くにありますが、八尾川の上流にはオキサンショウウオ等の生き物も住んでおり、もともときれいな川です。

けれど、下流はとても汚いです。ゴミが浮いていることは多々あり、先日は自転車が一台沈んでいました。川の底はヘドロで、夏になると臭いがきつくて窓が開けられない日もあります。私の父や祖父が子供だった頃には、この八尾川で夏になると泳いでいたそうですが、今ではそう聞いても信じられないくらいです。

何故このように川が汚されていくのでしょうか。自然の豊かなこの島で、この数十年のうちに何があったのでしょうか。

世の中が便利になるにつれて、自然は破壊されていきました。合成洗剤等が普及し、今ではほとんどの人が使っています。シャンプーやリンス、油等も一緒に、毎日毎日自然に有害な物ばかり流れていきます。しかし隠岐には下水処理をする施設が十分ではなく、そのほとんどが川へ海へ流されています。

このままでは近い将来きっと、川には何も住めなくなってしまうです。私の大好きな隠岐の自然の豊さは、水の美しさであるとも思っているので、それではあまりにも残念です。

それを回避するためには、どうしたらいいのでしょうか。私は住民と行政が両輪となって動かなくてははいけないと考えます。

まず住民は、定期的に川の掃除をする。そうすることで、汚すまいとする気運が高まると思うからです。まず気持ち。それから日常生活を見直して、油をふき

取ってから洗うなど、できることをどの家庭でも行うようにすると思います。

そして行政は、実態を把握し、下水の処理などを計画的に進めていく。予算等の問題があつて難しい面もあるけれど、一度壊れた自然をとり戻すことがどんなに時間も手間もかかることを考えて、行動にうつせたいと思います。

将来きれいになった川のほとりに花を植えたりベンチを置いて整備し、大人たちはそこで涼み、子供達は川で泳ぐ。そんな日が来て「昔八尾川はとても汚くて、泳げるなんて信じられないくらいだったのよ。」と自分の子供に話して、驚かれる日が来るといい。それが私の将来へのかなえたい夢です。